

---

# 南山アーカイブズニュース

Nanzan Archives News

第5号 2012年11月1日

---

## 目次

- 淑女たれ—創立者の思いと伊藤勝人先生の慧眼……………野呂 純二……2  
《私とアーカイブズ》尾張藩政の記録係—留書奉行のこと—……………林 順子……3  
《史資料紹介》かけがえない人として…谷川義美校長を偲ぶ……………西 経一……4  
《南山発見》『EVE, My 青春!』これまでの歩みとこれから……………蔭山 江梨子…6  
《史資料解説》南山学園講堂の映写機……………永井 英治……8
- 



南山大学講堂（現南山学園講堂）に設置された映写機

## 淑女たれ——創立者の思いと伊藤勝人先生の慧眼

野呂純二

南山学園が初めて入学生を迎えたのは、満州事変勃発の半年後、5・15事件の1か月と少し前でした。軍靴が高鳴りつつあるその時代の空気には「水を差す」かのように、創立者ライネルス師は、国際色豊かで個性を重んじるリベラルな学校をこの八事の地に開きました。61名の新入生たちには「心の自由な人でありなさい」「賢い人より善い人になりなさい」といつも語りかけ、先生方には「細かい校則は要らない。紳士たれ、この一言でいい」と語っておられたと聞きます。1932年のことでした。残念ながら師は1945年、敗戦の2週間後に亡くなられ、3年後の女子部の設立を見ることはできませんでした。もしも師がその時まで御存命であったなら、必ずや「女子部の校則は、淑女たれ、この一言でいい」、そうおっしゃったことでしょう。

その後女子部では服装や頭髪、持ち物等にさまざまな校則がつくられ、服装検査や爪の検査なども行なわれていきました。中には、そこまで規制が必要かと思われるような細かい規則もつくられ、創立者のリベラルな思いとは少し離れた方向に進んでいきました。そのことに深い憂慮を抱いておられたのが、伊藤勝人先生でした。生徒の個性を重んじ、人権を尊重するため、生活指導部長補佐になられた1987年、まず、中学生の長髪を禁じる校則(ブラウスの襟が隠れる程度までで切りそろえること)を、撤廃に導きました。生活指導部長になられた翌年、1990年には、生徒の主体的な判断力を育成するため、ベレー帽とかぼんの自由化を実現しました。いずれも、賛否両論のある難しい問題でしたが、伊藤先生は、常に生徒の立場になって真摯に問題をとらえ、合理的で説得力のある、創立の精神にふさわしい校則のあり方

を追究しておられました。当時発行されていた生活指導部通信『ひまわり』の中で、先生は次のように語っておられます。

「南山中高女子部では先生と生徒の信頼関係の上に立って、校則の改良がされてきました。これを、『校則が緩くなった』と、簡単に考えないでほしい。南山女子部では『校則がなくなったから、このことは何でも勝手にしていい、これは校則があるからだめだ』というような他律的な人間ではなく、『自分で考え、判断できる生徒、責任をもって行動できる生徒』になってほしいという期待と信頼のもとに校則の改良を決断したのです。このことを今一度よく考えてください。皆さんの責任はこれまで以上に重くなったのですよ。したがって、生活指導部では、皆さんは自分のみだしなみ等は先生に言われなくても当然きちんとできると考えています。不安な人は、早速、自分の身の回り・行動について点検し、『私はきちんとできます』という自覚を持ってください。それでも気づかないこともあるでしょう。そういうときは先生みんなで手助けしますから、安心してください。さあ、皆さん！ 南山女子部を名実ともに誇りに思い、より豊かな学校生活を力を合わせて作っていきましょうではありませんか。」

伊藤勝人先生はその後、1992年から12年間教頭職を務められ、数々の改革を推進、広報活動や理科教育にもご尽力され、志願者増や進学実績アップ等に多大な貢献をされました。昨年ご退職されましたが、創立者の遺志を継ぎ、西校長をはじめ歴代校長が重んじてこられた「人間の尊厳」の具現化に不朽の功績を残されました。誠に私たち後輩の鑑であります。

(南山高等学校・中学校女子部副校長)

## 尾張藩政の記録係—留書奉行のこと—

林 順 子

高橋実氏が国文学研究資料館編『藩政アーカイブズの研究—近世における文書管理と保存』(岩田書院、2008.)序章で指摘されているように、江戸時代において幕藩体制が長期にわたって存続し得た要因のひとつとして、継続的な文書の記録・整理・保存のシステムの構築があげられよう。幕府や藩の各部署の担当者たちがいつでも先例を参照し、かつ、記録を共有できてこそ行政は効率的に進められる。武士の官僚化が進む近世中期から後期にかけて、諸藩でシステム整備が行われた。但し、そのシステムは藩の慣習や意識などによって様々で、現在個別研究が盛んに行われている。

尾張藩については、「御文庫」と、その管理を担当する書物奉行への注目から、研究が始まった。それは、「御文庫」には、尾張徳川家初代義直が父家康から贈られた「駿河御譲本」が納められており、かつ、書物奉行の一人に、儒学のみならず、本草学や詩歌など広範囲の知識を持つ松平君山がいたためである。彼が編集した地誌「張州府志」や、藩士の系譜集『士林浜洄補遺』は、今も尾張藩研究の基礎史料として欠かすことが出来ない。こうして「御文庫」と書物奉行の研究は進展したものの、尾張藩政の記録者については不明な点が多い。そこで、雑駁ながら、その手がかりを拾い集めてみた。

諸藩では藩政記録の担当として留書奉行が置かれているが、尾張藩にも「留書」の言葉を冠する役職は存在する。「尾藩世記」(『名古屋叢書三編』2収録)によれば、寛文元年(1660)5月25日に「留書役」が置かれたという。但し、諸役所の古記録を収録した「武家命令究事」(『名古屋叢書』2収録)には、それよりも27年早い寛永10年(1633)8月4日に

すでに「留書方状留」からの引用記事がある。

さらに「尾藩世記」を繰ると、寛文5年1月15日初めて留書奉行が置かれたとの記録が現れる。享和年中(1801-03)制定と推定される「尾州家官制」(『名古屋叢書』3収録)によれば、留書、留書並、留書見習が留書奉行の支配下にあったようである。

彼ら以外にも、藩政記録を担当する者達はいた。

「尾州家官制」には、留書奉行の他、御右筆部屋留役、惣帳方留役之座、御部屋留役、寺社方留役も併記されている。先出の「武家命令究事」の引用元にも、「留書方状留」「留書方留」「留書方日帳」といった、留書役あるいは留書奉行による記録と思われるもののほか、「御国方覚書」「御用人状留」「寺社方留」「御右筆部屋青表紙留」「御納戸帳」「御船方古留」「川並奉行留」「御右筆部屋留」「岐阜奉行留」などがあり、様々な部署で記録をとっていたことがわかる。なお、「武家命令究事」は藩庫に収蔵された諸役所の古記録を、明倫堂内の継述館が寛政期以降に編集した「事績録」の抄録と考えられている。

最後に留書奉行の禄高にも触れておこう。「分限帳元禄之末宝永正徳享保頃」(『新修名古屋市史』資料編近世一収録)には、留書奉行5名の名と就任の年、禄高が記されている。禄高の最高が400石で、宝永4年に就任した奥田仙右衛門がそれにあたる。他の留書奉行も250石ないし300石の禄高であった。一方、同じ分限帳での書物奉行の禄高の最高は200石、御側御祐筆は同じく200石、御祐筆は150石にすぎない。これをみるかぎり、留書奉行は、尾張藩のアーカイブズの中核を構成する重職であったとも言えよう。

(南山大学経済学部教授)

史資料紹介

## かけがえのない人として……谷川義美校長を偲ぶ

西 経 一

谷川義美校長の訓話は何度も聞いているはずであるのに、ただ一つしか記憶していません。それは、ある年の全校集会の時のお話です。つまりは、いつ、どのような機会に、始業式であったのか終業式であったのか、あるいはまた学期に一度ほどあった全校終礼であったのかも失念してしまったということですが、その折こんな話をされました。

マルチノという軍人が吹雪の中を行進していたところ、寒さに震えているひとりの貧しい人に遭遇した。哀れに思ったマルチノは馬から降りて自分のマントを軍刀で半分に切って着せかけてあげた。まだ寒いというその貧しい人にもう半分のマントもかけてあげた。それでもまだ寒いというその人をマルチノは今度は抱きしめてあげた。するとその貧しい人はニコリほほ笑むと「私はあなたの愛するイエスである」と言ってマルチノを祝福された。それに続けて、「どんな人も、たとえそれが貧しい人であっても、一人ひとり神さまに愛されている、かけがえのない人なのです。出会う人一人ひとりを大切にするように心がけましょう。」と結ばれました。これはカトリック教会では有名な聖マルチノのエピソードに基づいているのですが、実は、このエピソード、行軍中であつたため施してあげるものを持ち合わせていなかった聖人でしたが、何とか少しでも助けてあげたいと思って、軍刀で自分のマントを半分に切り裂いて貧しい者に与えたというだけで終わっているのです。そこにまだ寒いというからもう半分も、それでもまだ寒いというから抱きしめてあげたというのは谷川校長の創作であります。そしてその創作は、もののみごとに、深い愛をもって出会う一人ひとりをかけがえのない人として接するよにとの指針を生徒たちの心に深く刻みつけることとなりました。

人間一人ひとりのかけがえのなさに対する意識は、谷川校長の常に心しておられたことであつたようです。それは第十三代南山高等学校・中学校校長として就任されたときの「新任あいさつ」の中にも明確に示されています。

「私はこの南山に学ぶ生徒たちが、キリスト教的愛の精神を学び、自分はもちろんのこと、自分と関わりのある人を尊敬し、大切に作る心、しかも自分が気に入る人や好きな人だけを大切にのではなく、自分の気に合わない人、極端に言えば、自分にとって敵と思われる人さえもかけがえのない人として受けとめる幅の広い、豊かな人間に育つようにしたいものです。」  
 (『南山ハイスクールブリテン』29号 1987年4月23日) さらにたとえば1993年度の卒業式式辞の中でも「南山学園でいわれる人間の尊厳とは、神はご自分にかたどって人を創られたという聖書の言葉に基づいています。人間は神のイメージとして創造され、神の永遠の命のうちに参与する目的をもっています。ですから、私たち人間一人ひとりかけがえのない者であり、どんな人でも大切な人間であるということです。これを証するのが南山学園の中学・高等学校で学んだ人たちであり、またみなさんの一つの大きな使命でもあります。卒業生のみなさんは、この建学の精神を生涯心にとめていただきたいと思います。」と卒業生を激励されていますが、ここにも南山学園の教育目標の基軸である「人間の尊厳」が、人間一人ひとりかけがえのない者として大切にされることとして捉えておられる谷川校長の信念を垣間見ることができます。

上記、『南山ハイスクールブリテン』29号における「新任あいさつ」に、谷川校長のさらにもう一つの際立った特徴を読み取ることができます。それは国際性

に関する次のような指摘です。

「南山学園の特徴である国際性を持たせる教育をさらに充実させたいと思っています。私は生徒一人ひとりが心を開き、他国の言葉やメンタリティを理解し、どこの国の人も差別することなく、関わっていける人になって欲しいのです。そのために、特に外国語を重視し、本校に学ぶすべての生徒が、国際理解を深め、国際社会に生きる立派な人になって欲しいと願うのです。」司祭叙階後、十一年間、南米パラグアイの奥地の教会で宣教師として活動された、その生の体験に根差した国際性涵養の必要性は、揺るぎのない確信として、生徒たちに機会があるたびに語られておられたであろうことは疑う余地がありません。

事実、南山中学・高等学校女子部創立40周年を迎えるにあたって、谷川校長は山田一美副校長をリーダーとする「女子部の教育を考える会」を設置し、この会に対して1. 教科指導および教科外指導 2. 宗教および情操教育 3. 教育環境の整備 4. 教職員の組織および研修の4項目について諮問し、答申するよう指示なさいました。この項目だけでは判然としませんが、答申の中に「英語教育の充実について」という一段があり、外国人教師の長期雇用と待遇の改善をはかること、英語教育充実のための施設（スピーチの練習と指導、英会話実践指導、視聴覚教材活用指導のため）を新設すること、そして各学年に少なくとも一名は英語科教員が担任としているように人事配置することの必要性が強調されていて、これらすべては当時新築された現在の女子部東校舎の英語教育のための施設をはじめとして、ことごとく実現されているのです。これは当時の「女子部の教育を考える会」およびこれを引き継ぐ形で設けられた伊藤勝人教頭を委員長とする「女子部総合計画委員会」のメンバーをはじめとする教職員事務職員の努力は言うまでもないことですが、そこに谷川校長の強力なリーダーシップがあったことは紛れもない事実でありましょう。

2011年12月、七十年余の生涯を神に捧げ尽くされた谷川校長の葬儀の際に配られたカードには、彼自身の遺志によって一切の学歴も職歴も記されませんでした。ただ生まれた、司祭になった、そして死んだ、と

それだけでした。修道者たる者かくあるべし、と実に最後の最後まで強力なリーダーシップを発揮されました。出会う一人ひとりをかけがえのない者として大切にすること、どこの国の人も差別することなく関わっていける人になること、職歴には記されない校長としての谷川神父の念願を今一度心に刻まねばならないとの思いを新たにすところ。個人的に谷川神父から贈られたカードに記されている聖句で結びます。

神を愛する者には万事ともに働きて  
益あらざるはなし（ロマ書8章）

（南山高等学校・中学校校長）



谷川義美校長（学園史料室所蔵）

南山 発見

## 『EVE, My 青春!』これまでの歩みとこれから

蔭山 江梨子

2011年12月24日、『EVE, My 青春!』は30回目の歴史を刻みました。30年という年月に思いを馳せる時、かつて「合唱ボランティア」の総長を務めた生徒の言葉が思い出されます。「『伝統』とは『イヴマイを続けること』ではなく『一回、一回にベストを尽くし、それを続けること』」。いつの時代も生徒たちが青春そのものをこの行事に捧げてきたからこそ伝統のバトンをつなぐことができたのでしょう。

現在、『EVE, My 青春!』は中学2年生と高校1年生が全員、中学3年生から高校3年生までの有志からなる合唱ボランティア、そして聖歌隊とオーケストラ部の総勢約650名で創りあげています。師走の寒風が吹きすさぶ中、アンコールまで含めると約1時間半に及ぶ演奏会です。立っただけでもつらい状況であり、忍耐の一言に尽きると言っても過言ではありません。また、合唱や演奏だけでなく、ペンライトによる演出やオーディションによって選考された生徒による司会進行、また同じく生徒によって描かれたイラスト入りの歌詞カードもこのコンサートに彩りを添えています。

今となっては当たり前となっているこの形態ですが、ここにたどりつくまでには数々の試行錯誤がありました。きっかけは1982年夏のこと。布池教会の寺田正親神父から、名古屋市栄のセントラルパークでクリスマス・キャロルの合唱をしてもらえないかとの打診がありました。議論の末に実施するという結論に至りましたが、当時参加したのは、聖歌隊と高校2年・3年で音楽を選択していた生徒、そしてボランティアの約320名でした。簡単な二部合唱のキャロルを数曲と、女声三部合唱に編曲されたヘンデルの「ハレルヤコーラス」をドリマトーンとい

う電子オルガン1台の伴奏で歌ったのです。心は燃えていたとはいえ、その歌声は車の騒音にかき消され、もちろん照明も音響設備もわずかなものであり、聴衆にはほとんど届かなかったようです。

第2回目から中学2年生と高校1年生が全員参加となりました。人数こそ前年の倍以上にはなりましたが、生徒たちの心に「何のために歌うのか」という思いが育まれているはずもなく、一部の生徒たちからは不満の声があがるような状況でした。

第3回目からようやく軌道にのってゆきます。階段をステージとして使い、中央にひな壇を設置するという現在の演奏スタイルの原型が完成しました。この年から聴衆と共に「きよしこの夜」「諸人こぞりて」を合唱することも始まり、市民のみならず「イヴマイ」が認知されるようになってゆきます。

第4回では笠松女子刑務所関連会社の協力を得て衣装であるガウンをつくりました。真っ白なこの衣装は夜空に映え、演奏会全体の雰囲気盛り上げる効果を与えました。伴奏にはオーケストラ部の前身である器楽隊が加わります。マスコミで大きく報道されたことも生徒たちに自信と誇りを与えました。

このように少しずつではありますが、イヴマイはいわゆる演奏会としての形態はもちろん、合唱や演奏の音楽的レベル、そして生徒たちのイヴマイにかける思い、教員の指導体制が年を重ねるごとに変化し、成長していったのです。特に生徒たちが単に「歌う」のではなくて「歌いたいから歌う」「歌わせていただく」ように変化していったことは教育的にも大きな意味のあることでした。その変化のきっかけとなったのは1992年、第11回のことです。みぞれという悪天候のため、やむを得ず中止と判断されたに

も関わらず、生徒たちが「どうしても歌いたい」と涙ながらに訴えたのです。生徒たちが一体となって歌ったその時の様子は多くの人々の心に感動を与え、新聞にも大きく報道されることとなりました。

さらに、最初の数年こそ教員主導の形で進められてきたものの、やがて生徒たちの中の学年リーダーが中心となってイヴマイを牽引してゆくようになります。そのため、自主性を育む教育活動の一環としても欠かすことのできない行事となりました。まず、リーダーたちはこれまで先輩たちが築き上げてきたイヴマイの歴史を学んだ上で、自分たちはどんなイヴマイを創りあげたいのかを真剣に話し合います。「これまでイヴマイを支えてきてくださったすべての人々へ感謝の気持ちを込めて歌いたい」「東日本大震災の被災地の方々が少しでも元気になってくださるようお願いを込めて歌いたい」。こうした純粋で真っ直ぐな言葉が議論の中で紡ぎ出されてゆくとき、教員の方がハッとさせられることもしばしばです。

9月からスタートし約4か月にわたる練習は、音楽を専門的に学んでいるわけではない生徒たちにとって決して平坦な道のりとは言えません。ソプラノ・メゾ・アルトのパートに分かれて、それぞれ正確にリズムと音程、旋律を理解し、歌詞を暗記し、さらに美しいハーモニーを生み出すトレーニングを重ねます。そのためかなりの根気と集中力を要することは想像に難くありません。授業、学年練習、そして中2と高1の合同練習、聖歌隊やオーケストラ部、合唱ボランティアも加わっての全体練習と、多くの時間をかけて、生徒たちはそれぞれの課題を乗り越えてゆきます。練習はつらい、だからこそ感動に満ちた本番を迎えることができるのだと生徒たちは学びます。

さらに、中学2年生と高校1年生全員がこの行事に参加していることにも大きな意味があります。全体を統率している高1の姿に中2は大きな刺激を受け、2年後には自分たちも先輩たちのようになりたいと思うようになるのです。また、高1は中2の姿にかつての自分たちの姿を重ねて優しくリードします。時には中2が高1に勝る歌声を聴かせてくれる

こともあり、二学年が支えあい、刺激し合いながら成長してゆく姿には驚かされます。さらに全体練習の場には高校3年生も加わり、「私たちにとって最後のイヴマイ」という思いが、参加しているすべての生徒に大きなエネルギーを与えます。節目となった第30回は卒業生も合唱に加わりました。全員で歌った「ハレルヤコーラス」が圧巻であったことは言うまでもありません。『EVE, My 青春!』はまさにすべての聖霊生にとっての誇りなのです。

また、イヴの夜の本番を成功させるだけにとどまらない活動を学年リーダーが中心となって展開しています。幼稚園や保育園、老人福祉施設等でクリスマス会を催したり、ホームレスの方への炊き出しをお手伝いするなど、毎年さまざまなボランティア活動に取り組んできました。自分たちの歌声に涙する人々を目の当たりにすることで生徒たちは深い感動を覚え、むしろ自分たちの方が励まされるという経験をします。こうした社会とつながる活動を通して視野を広げ、思いやりの気持ちを育てゆくのです。

さて、今年も新たに31回目の歴史を刻もうとしています。クリスマス・イヴの夜、音楽によって、『EVE, My 青春!』という行事によって、大勢の人々がひとつに結ばれることは平和の証に他なりません。これまでずっと大切にしてきた精神を変えることなく守り続けてゆくのと同時に、新たな気持ちでこの行事を創りあげてゆくことも求められています。生徒たちの純粋な心と熱い思い、そして斬新な発想と音楽そのものがもつ力を信じて、これからのイヴマイを創りあげてゆくことを目指したいと思います。



第30回『EVE, My 青春!』の様子  
(聖霊高等学校・中学校教諭)

史資料解説

## 南山学園講堂の映写機

永井英治

表紙の写真は、南山大学講堂（現南山学園講堂）に設置された35mm映写機を撮影したものである。この映写機設置は1952年度に計画されており、1953年12月23日の「南山大学学長告示」第21号に、「本学に於て映画上映に要する設備の完成をみた」とあることから、それ以前に設置されていたことがわかる。

この映写機の制作・販売会社は東京航空計器といい、「ニュースター」と命名されたこの機種は、1946年の販売開始以後、各地の映画館に設置された。光源は、2本のカーボンの間に放電して発熱させるカーボンアークである。

学長告示第21号では、映写機設置にともない、大学に「映画委員会」を設置することを伝えている。この委員会には、大学の教職員のほか、男子部および女子部から教員各1名が加わっており、学園全体を対象として、上映フィルムの選択を行なうものであった。

『南山大学新聞』1954年1月30日、第1面によれば、映画委員会による第1回の上映作品は『宝島』であり、第2回以降、月1回の上映会が洋画・邦画を問わず予定されている。

学園講堂での上映は、大学祭でも行なわれた。現学園講堂での大学祭での上映会は、南山大学が山里町キ

ャンパス（現名古屋キャンパス）に移転した1964年度まで行なわれたが、その後は、大学内の教室または学外施設で実施されるようになった。

現在では稼働しなくなってしまったこの映写機は、訪れる人もいない学園講堂最上階の映写室で、学園史と映画史の一齣を今もなお静かに伝えている。

（南山学園史料委員会副委員長）



南山大学新聞33号(1954年1月30日)第1面